弥生時代尾張地方の〈囲郭集落〉について

石　黒　立　人

はじめに

弥生時代の集落は、低地性・高地性を問わず周囲に溝をめぐらす例が多い。溝のなかには「濠」と呼称するのが相応しいような大規模な例もあり、そのような「濠」をめぐらす集落は一般に「環濠集落」と呼ばれている。

尾張地方においては朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡が「環濠集落」の代表例である。しかし、なかには「濠」が完全にめぐらず「環濠集落」とは呼べない形態を有するものもあり、本稿ではそのような集落をも包括して〈囲郭集落〉と呼ぶ。

以下、当センターの調査した朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡の最新成果を踏まえ、尾張地方を中心に〈囲郭集落〉の様相と変遷を概観し、若干の考察を加え今後に備えたい。

〈囲郭集落〉と分類

〈囲郭集落〉とは、溝・土塁・柵等の視覚的・物理的な結界施設を有する集落を意味する。結界の対象は集落の中核をなす居住域であり、生産領域・墓域を含まないのが通例である。居住域内を走る溝は、結界内の分割を意味するものであり、〈囲郭集落〉の結界施設とは性格を異にするので除外する。しかし、結界施設を有する居住域が独立的・完結的に単位をなし複数存在する場合、それぞれの単位を〈囲郭単位〉と呼称する。つまり、〈囲郭集落〉は、単一の〈囲郭単位〉から成る場合と、複数の〈囲郭単位〉から成る場合があるということになる。

さて、〈囲郭集落〉は以下のように分類する。

A型　結界施設が完全にめぐるあるいは完全にめぐると思われるもの。〈囲郭単位〉が複数、例えばn個からなる場合A^nと記述する。

B型　結界施設が完全にめぐらないもの。例えば結界施設の一部を自然的障壁に代替させるようなもの。〈囲郭単位〉が複数の場合はB^nと記述する。

なお、ここでの分類はそれぞれの〈囲郭単位〉の性格、集団としての位相を問題にしていない。また、結界施設の構造・平面形態についても同様である。あくまで大枠としての〈囲郭集落〉の基本構造に基ずく分類である。細密・精緻な分類は、現状における資料的不備からみて時期尚早であり、今後の課題とする。

〈囲郭集落〉の事例

〈囲郭集落〉の変遷を概観する上での時期区分は次のようにする。

Ⅰ期　遠賀川式段階。有段・削り出し突帯十沈線少条等の古相をⅠａ期、削り出し突帯十沈線多条・貼り付け突帯・多条沈線などの新相をⅠｂ期とする(1)。

Ⅱ期　朝日式期

Ⅲ期　貝田町古期(2)（阿弥陀寺Ⅰ期(3)）をⅢａ期、阿弥陀寺Ⅱ期(4)をⅢｂ期とする。

Ⅳ期　阿弥陀寺Ⅲ期１段階(5)（大渕遺跡ＳＥ02下層(6)）をⅣａ期、従来呼称しているところの高蔵式期（阿弥陀寺Ⅲ期２段階(7)）をⅣｂ期とする。

Ⅴ期　山中式期

Ⅵ期　欠山式期(8)

なお、Ⅳｂ期とⅤ期の間、Ⅴ期とⅥ期の間には未知の型式・様式の存在する可能性があり、Ⅱ期も細別可能性は留保している。

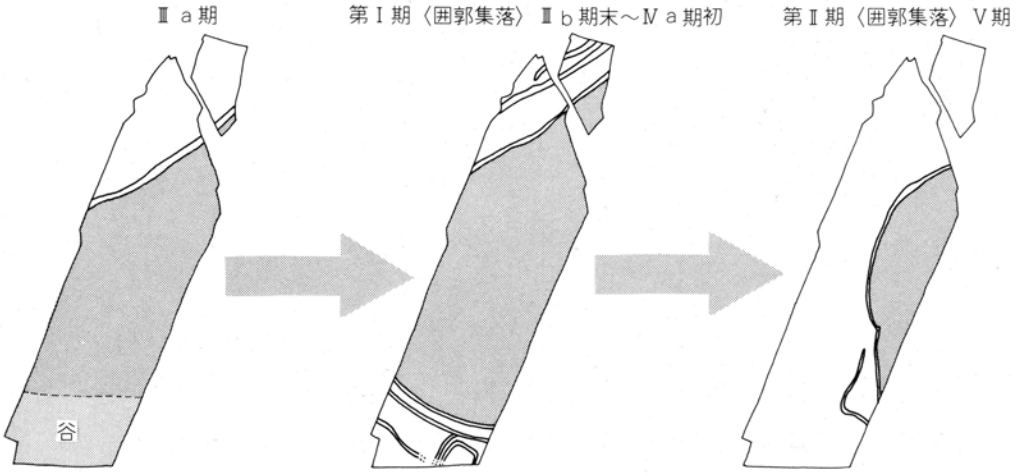
1　阿弥陀寺遺跡

尾張平野最南の標高１ｍ内外の低湿地帯に位置する遺跡である。昭和56年から環状２号線建設に伴う事前調査が実施され、本年度でほぼ完了した。

Ⅲａ期　Ｂ型？

Ⅲａ期の大溝が集落の北を、自然の谷が南を画している。形態的にはＢ型の範疇に含まれるが〈囲郭集落〉である可能性は低い。

大溝は幅約４ｍ、深さ約1.5ｍを測る。埋土は砂層の堆積が著しく常時水流があったものと思われる。Ⅲａ期の洪水性堆積により埋没する。



阿弥陀寺遺跡〈囲郭集落〉変遷図　　１：4000

第１期　Ａ型

２条の溝を基本とし、北と南で部分的に１条付加される。それぞれの溝は若干規模の違いはあるものの、平均して幅３ｍ、深さ１ｍを測る。断面逆台形を呈する。

溝の埋没は自然埋没を基本とするが、上層は包含層の２次堆積が著しく、整地された可能性がある。しかし、全く平坦にされていたわけでもなく溝上面の凹地部分には黒色有機土の堆積がみられた。土器廃棄は居住域に内接する部分に集中した以外多くはない。

溝それぞれの開削期は、Ⅳａ期に埋没が始まり一部はかなり進行しているところをみると、Ⅳａ期の初めかⅢｂ期の末ということになる。

「土塁」の存在は、溝上層埋土の整地的様相から推測できる以外積極的に裏付ける資料はない。基本２条間に排土を盛り上げれば高まりとなるが、排土を処理した土の高まりと「土塁」とは意味が異なる。不明としか言う他はない。

出入口は、北端の溝が南へ弓なりに屈曲している部分や南部の溝配置の不規則な部分に存在していた可能性が高い。部分的多条化、不規則化が〈囲郭集落〉の弱点を補うものであるなら、そこに弱点となり得る出入口の存在を想定しても良かろう。防御集落であればなおさらのこと安全性の保障が必要である。

第２期　Ａ型

現状では不連続の２条の溝からなる。幅約２ｍ、深さ最大で１ｍとたいした規模をもたないが、該期の包含層が中世以降の削平によって全く残存していなかった事実を考慮すれば、本来の溝の規模はさらにプラスアルファされる。この点は第２期も同様である。溝断面は一部Ｖ字形をなすが、だいたいはＵ字形を呈する。

溝の埋没は基本的に自然埋没のようであり、人為性は部分的にしか認められない。土器廃棄はＶ期の土器が若干ある程度で、第２期に比べれば著しく少量である。Ｖ期中頃の土器は溝底から30cmほど浮いており溝底からの出土はなかった。溝の開削期はＶ期中頃あるいはＶ期の古い段階であり、Ⅳｂ期には遡らないと思われる。

溝の配置は、２条の溝の対面部分が特異な状況を呈している。北から続く溝は、ゆるい円弧を描いてきたのが南溝の延長線部で東へ突出するかたちで小さな鍵手状をなし、南溝は継手のようにＬ字をなして東へ屈曲する。調査区外において両溝がどういう配置を取るか知ることはできないが、両溝が接続するしないにかかわらずその変則性は第１期以上に出入口の存在を窺しめる。単純な切れ目とは異なるこうした複雑さは、城郭の出入口に通じるものがある。

2　朝日遺跡[10]

標高約２ｍの微高地上に立地する。推定面積約70万㎡という東海地方随一の規模を誇る大遺跡である。遺跡はⅠ期に始まり、いわゆる遠賀川式土器を主体的に出土する遺跡の東限に位置する。

Ⅰａ期は「旧河道Ｃ」（以下谷Ｃと呼称する）南の微高地上に位置する貝殻山貝塚・二反地貝塚を中心とする地域に居住域を設定し、Ⅰｂ期になると一部が谷Ｃ以北の微高地上に分岐して以後の北居住域の核を形成する。この時期から朝日遺跡における２居住域併存が始まるが、〈囲郭集落〉の形成はみないようである。

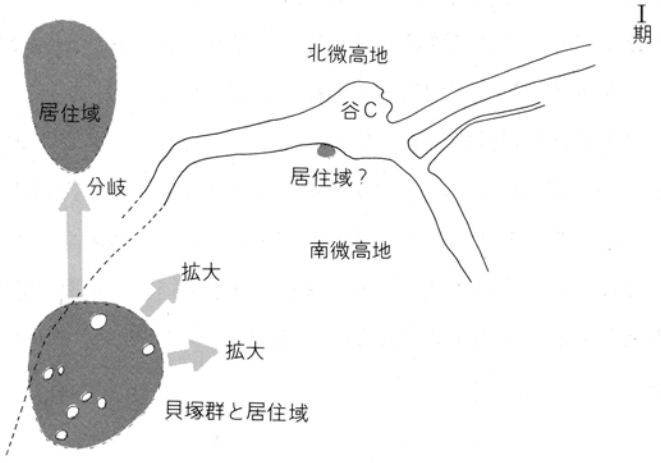
第１期　Ａ型

北微高地では、居住域北縁の第86区、南縁の第77区で、幅約５ｍ、深さ約 1.6ｍ の大溝（ＳＤ364）が検出されており、径は300m 以上あるようである。Ⅱ期のうちに埋没を始め、貝・破損木製品を含む生活残滓投棄場と化す。

南微高地においては報告書刊行時に未検出であったが、本年度調査（60Ａ区～60Ｅ区）において大溝を検出した。

60Ａ区ＳＤ06、60Ｂ・Ｃ・Ｄ区ＳＤ02が結界施設と推定されるものであり、両者は同一と考えられる。

ＳＤ06は60Ａ区西半においてⅤ期の（ＳＤ177）と重複し、東端で北へ強く屈曲する。先端は明らかにできなかったが、恐らく谷Ｃを横断して北上するものと思われる。ＳＤ06が微高地から谷Ｃへ移行する部分には、幅0.3m、高さ0.6m 程の陸橋部が存在し、先の北上して谷Ｃを横断する溝と、谷Ｃに平行して東進する溝とに分岐する。後者は下層のＳＤ10の再利用、あるいは掘り直したもののようである。溝幅約５ｍ、深さ約1.8ｍと規模は大き



朝日遺跡集落変遷図－１　　１：9000

い。

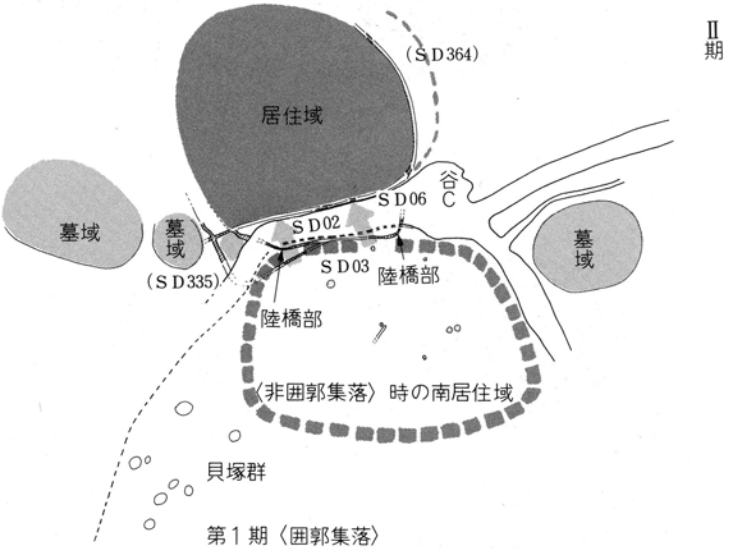
ＳＤ02は60Ｄ区で幅1.5m、高さ0.6m程の陸橋部によってａ（東側）とｂ（西側）に分かれる。陸橋部は微高地から谷Ｃへの移行部にあり60Ａ区と同じ様相をみせる。陸橋部の東際及びＳＤ02ｂ内には南向き斜に、後述する第２期〈囲郭集落〉（ＳＤ160）と同様の枝を張った杭が60Ｅ区にかけて、ほぼ１ｍ間隔で10本ほど遺存していた。ＳＤ02ｂの先端は恐らく谷Ｃを横断して対岸北微高地に存在する同時期の溝に接続する可能性がある。対岸の溝底がかなり高いことをみると、ＳＤ02ｂ溝底も北へ上昇していたが故に検出できなかったのであろう。ちなみに対岸の溝底には杭痕がいくつか認められＳＤ02ｂに類似している。

ＳＤ02南肩には、現状で厚さ約80cmの盛土が存在し、土塁の可能性が考えられる。ＳＤ02南壁よりに地山土の再堆積がかなり多量にみられることは、ＳＤ02南壁にそって地山土による盛土がなされていたことを示すと思われる。したがって盛土も本来はかなり高いものであった可能性がある。

ＳＤ06・ＳＤ02の開削期は、Ⅱ期での谷Ｃ内におけるSD10・ＳＤ01の開削→貝の大量廃棄による埋積→ＳＤ06・ＳＤ02の開削という順番からみてⅡ期でも終末に近いようである。ＳＤ06・ＳＤ02がⅢａ期になっても深さ１ｍ程の窪地状をなしていたことも、Ⅱ期終末近くに開削されたことを示していよう。

ところで、第１期〈囲郭集落〉を考える場合に大きな問題がある。

ＳＤ06・ＳＤ02が〈囲郭集落〉の結界施設とした場合、その対象は南ではなく北のようだからである。それに加え、北肩にピット列のあるＳＤ03もほぼ同時期と考えられ、配置からみてＳＤ02・（ＳＤ335）に接続し〈囲郭集落〉の結界施設となる可能性がある。ＳＤ03



朝日遺跡集落変遷図－２　　１：9000（　）は報告書遺構番号。
以下同じ。

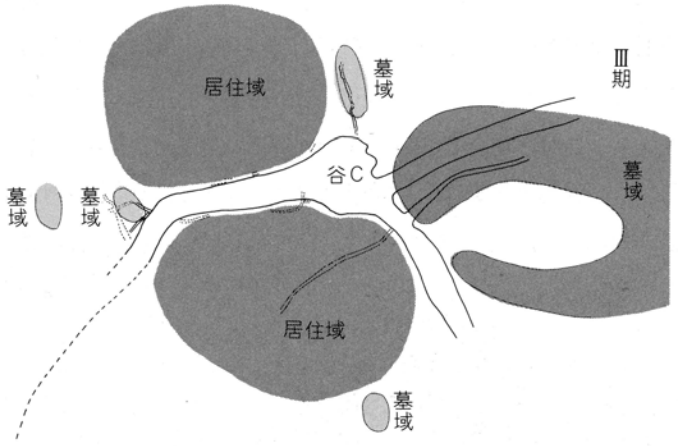
北肩にはピット列だけでなく土盛りも認められ、北側が集落内であることを示している。このように第１期〈囲郭集落〉南部の重装化は著しく、複郭式とでも呼称すべき特徴を有しており注目される。

未だ調査継続中であり、性急な判断は避けねばならないが、これまでの調査成果を踏まえ見通しを述べるなら、第１期には南微高地に〈囲郭単位〉は存在しなかったと言わざるを得ない。つまり、その時点では囲むべき居住域が不在であったということである。もちろん、土器編年上では南・北住居群併存となるが、遺構変遷を整合的に理解しようとすれば〈囲郭単位〉すなわち囲むべき居住域は北のみということになる。(11)

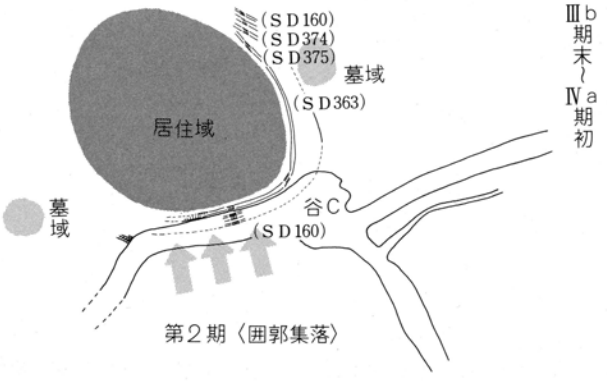
以上から、朝日遺跡Ⅱ期は〈非囲郭集落〉→〈囲郭集落〉→〈非囲郭集落〉という変遷をみせるとともに、〈囲郭集落〉時には居住域が北に統合されていたと考える。

第２期　Ａ型

北微高地は、居住域北縁第86区・87区で北から(ＳＤ160・375・374・363)の４条、居住域南縁第77区の北微高地南端から谷Ｃにかけて北から(ＳＤ363・374・375・160)の４条によっ



朝日遺跡集落変遷図－３　　１：9000



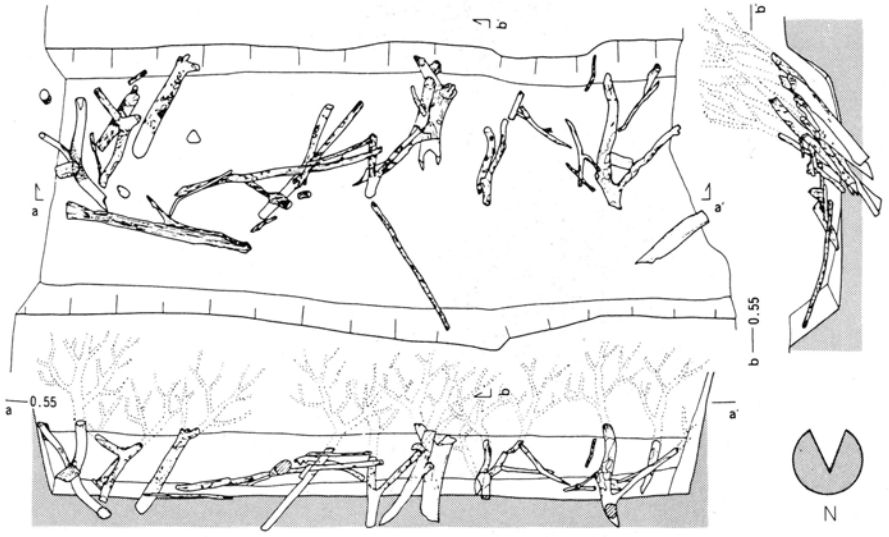
朝日遺跡集落変遷図－４　　１：9000

て居住域が画される。南北両端のうち、南の(ＳＤ374・375)は切り合い関係にあるから、同時存在は最大３条ということになる。

溝の開削期はⅢｂ期末かⅣａ期初めと考える。南縁の(ＳＤ374・375)はⅣａ期にはすでに埋没を開始しており、また谷ＣもⅣａ期段階で湿地化及び埋積がかなり進行しているからである。

４条の溝は規模的にさほどでもないが、南縁の(ＳＤ160)のみは特殊な構造をもっており注目される。すなわち、枝を張ったカシの木（検出時に上部はすでに欠損していた）が溝の南寄りに斜めに立てならべられていたのである。杭というには打ち込むことは不可能であり、事実下端は杭先のように尖っておらず斧で切り込みを入れたあと折り取られたような状態のままであった。したがって、これらの杭は溝の中に立てならべられていたという表現になるわけであるが、その特徴が第１期〈囲郭集落〉ＳＤ02ｂの杭とまったく同一である点は重要である。これらの杭列は、谷Ｃ（この時期河道の形成された痕跡はなく湿地化している）内における水流を調節するなどというものではなく、まさに〈囲郭集落〉を補強する「垣」という意味において「逆茂木」と見做しうるものであり、注目すべき資料である。さらに本年度調査では、この南側に複数の杭集中地点も検出されている。いずれも南へ傾斜して打ち込まれ、しかも密集度が著しい。同じ性格を有する可能性があり注目される。

北微高地には上記のように厳重な結界施設をもった〈囲郭単位〉が存在したらしいのに対し、南微高地には〈囲郭単位〉は存在しない。恐らく第１期と同様居住域が不在となっていたためであろう。



朝日遺跡第２期〈囲郭単位〉逆茂木状遺構（SD160）※報告書から転載一部加筆

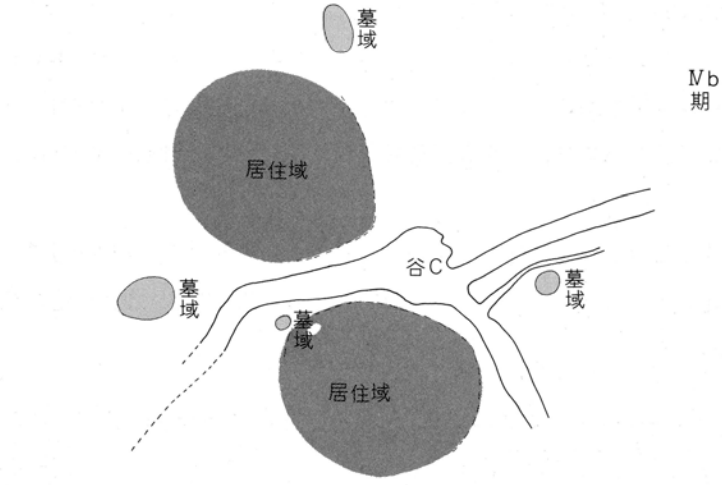
第１期・第２期とも居住域が北へ統合されるという状況は、朝日遺跡における北の優越性を示す以上に、単位というものの性格を改めて考えさせるものである。つまり、２単位から１単位、１単位から２単位へという伸縮性とそれぞれの単位における同一性はどのように整合しているのか、我々の抽出する単位は過程における一断面にすぎないのである。

第３期　A²型

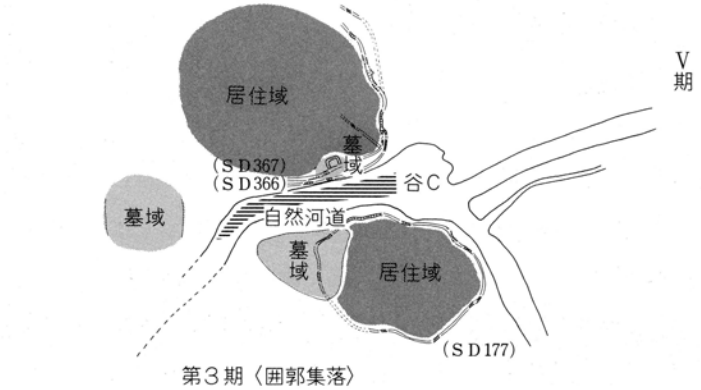
北微高地は（ＳＤ366・367）、南微高地は（ＳＤ177）が結界施設をなしている。

溝の規模は、幅４～５ｍ、深さ1.6～２ｍ強を測り、〈囲郭単位〉の径は凡そ200ｍ×130mと、以前が300m前後であったのと比較して大幅な縮小をみせる。もっとも、以前は２つの居住域が１つに統合されていたせいもあり、実質はあまり変わらないのかもしれない。

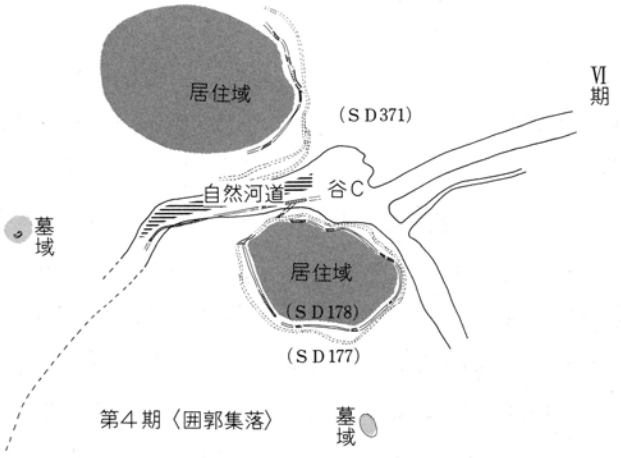
溝の開削期は北・南ともⅤ期であるが、北の状況をみるとⅤ期中頃に開削されたようであり、古い段階にまで遡る可能性は低い。



朝日遺跡集落変遷－５　　１：9000



朝日遺跡集落変遷図－６　　１：9000



朝日遺跡集落変遷図－7　　1：9000

第4期　A²型

北〈囲郭単位〉は第3期を踏襲しつつさらに内側に1条(SD371)付設され、南〈囲郭単位〉は谷C側を除いて内側に1条(SD178)付設され2条となる。

溝の規模は第3期に比べ縮小し、幅はそれほど変わらないが深さはかなり浅くなっており、ところによっては1mほどしかない部分もある。

溝のうちメインはⅤ期以来のものであり、そのまま利用するか改修して使用しているにしても特に時期を決めることはできないが、新しく付設された溝はいずれもⅥ期に開削されているようである。恐らくⅥ期でも早いうちかと思われる。埋没はⅥ期後半にはかなり進行しており、一部に元屋敷段階の土器も混入する。

第3期・第4期の〈囲郭集落〉がそれまでとうって変わって2つの〈囲郭単位〉からなるという変化は、ひとつには集団関係の変化に起因するとしても、この時期の谷Cの本格的な河川化にも原因があったと思われる。以前まで谷Cは交通の障害となることはなく、そのために結界施設によって取り込まれたりもしていた。しかし、このⅤ期以降の本格的な河川化によって自然的障壁としての有効性が増したのであろう。恐らく墓域の飽和化も相俟って、2つの〈囲郭単位〉に分離したと考えられる(12)。

3　大廻間遺跡(13) B型

知多半島の基部近く、伊勢湾側へ向かって複雑に張り出す標高30mほどの丘陵支丘のつけ根を横断して、長さ約20m、幅最大3m最小2.2m、深さ最大2.7m最小0.8mの溝が直線的に掘られている。居住域は支丘先端側に存在したらしいが確認されていない。時期は埋没はⅥ期であるが、Ⅴ期の土器も出土しているからⅥ期以前の開削と推定できる。

以上の他、A型は見晴台遺跡(14)（Ⅴ？～Ⅵ期）B型は高蔵遺跡(15)（Ⅰb期）がある。三河地方では、本神遺跡(16)（Ⅵ期)・東郷遺跡(17)（Ⅵ期）がA型、欠山遺跡(18)（Ⅵ期）もA型

のようである。

伊勢湾周辺を見渡しても決して事例に恵まれているとはいえない状況にある。今後の資料集積が望まれる。

〈囲郭集落〉の出現とその背景

〈囲郭集落〉出現の契機は何か。「濠」と呼ばれるほどの長大な溝をもって自らの生活の場を囲繞したのは何の為か。

かって石野博信氏は「高地性集落が長大な濠をめぐらしていることによって軍事性を考慮されているのに対し、低地の巨大な濠をもつ遺跡を軍事的性格をもった集落の範疇から除外[19]」するのは片手落ちであるとして、低地の環濠集落を「水城」と呼称し、高地性集落—「高城」と対比するなかでその防御的・軍事的側面をクローズアップした。

都出比呂志氏も、環濠集落を石野氏と同様防御的機能をもった集落として捉えたが、石野氏が高地性集落として区別した台地・丘陵上の環濠集落を包括的に捉えた結果、高地性集落に与えられていた性格を環濠集落も共有することになった[20]。

石野・都出両氏の言に代表されるように、弥生時代の環濠集落を防御集落と捉える立場が現在大勢を占めている。

環濠集落に代表される〈囲郭集落〉に防御機能があったかどうかは、長大な濠を見れば肯定せざるを得ないが、防御性については中世の環濠集落や堺の環濠都市からの類推であり、石野氏が「軍事性を実証することはむずかしい[21]」と述べられていることもまた事実である。

〈囲郭集落〉の防御的性格を実証するというよりは、〈囲郭集落〉の主たる機能として防御機能を前提に措き、そこから社会的緊張（その極相が争乱）を導き出し、それを裏返すことによって〈囲郭集落〉の消長を説明づけてきたという従来の傾向は、「軍事性を実証することがむずかしい」故に循環論理に陥ってしまったかの感がある。このままでは社会的緊張の具体相が不明であるし[22]、実体としての〈囲郭集落〉を正当に評価することもむずかしい。また、前提を替えれば結論も変わるというように、論理自体も真に不安定である。

そもそも〈囲郭集落〉は、集落変遷の一断面を示しているのであり、仮に基本設計に組み込まれていたとしても、あくまで潜在的要素として組み込まれているにすぎない。顕在化するのは特定の条件下においてであり、その条件が明らかにされないことには〈囲郭集落〉の性格を決定することはできない。

先に概観したように、尾張地方に限っても〈囲郭集落〉の出現には波があり、また形態・構造にも個性がある。それぞれ、その時々の条件に制約された感がある。そうした制約

を生み出した条件は、〈囲郭集落〉の防御性を強調するのみで導き出せるものではない。〈囲郭集落〉出現時の社会・文化を詳細に検討し、関連事項を抽出する必要がある。一概に断定を下すのは避けるべきであろう。

〈囲郭集落〉出現の契機において、それが外在するか内在するかという点では外在するといえる。〈囲郭集落〉には、いわゆる「拠点的集落」に含められるべきものも存在するが、〈囲郭集落〉としての恒常性を有しないことは先述したとうりであり、両者に基本的な相関はない。〈囲郭集落〉化に際し、拠点性は何ら必要条件を充たすものとはならないのである。集落成員の心理的安定を促す必要から〈囲郭集落〉を形成するとした場合でも、その安定性がしかも間欠的に何故求められなければならないかという点では、当然集落外の不安定性が対置されることになるから、すでに契機は外在することになる。恐らくすべての契機は外在するのであり、そこにおいて外的契機の緊急度・重要度が問題となる。

自然的要因において緊急度・重要度が高いのは、例えば低湿地における非常時の出水などのような災害である。しかし、そうした災害の多くは突発的であり、〈囲郭集落〉として予め準備するなどということはできないし、またそうした災害の起こり易い地域に集落を形成するなら、当初から〈囲郭集落〉として成立していたはずである。

ところが、〈囲郭集落〉は地形に左右されることなく、低湿地であろうが台地であろうが丘陵上であろうが成立するというように、場面は変わっても同じである。集落が成立すれば、それはいつでも〈囲郭集落〉になりうるのである。

以上からみて、〈囲郭集落〉の成立に関して自然的要因がベースになることはまずないと考える。仮にあったとしても、ほとんど特殊と言って良いケースであろう。とすれば、当然社会的要因が大きく関与しているということになる。

1　A型の出現と背景

定形的な〈囲郭集落〉であるA型は、現状ではⅰ）Ⅱ期末、ⅱ）Ⅲb期末からⅣa期初め、ⅲ）Ⅴ・Ⅵ期に存在したことを確認している。

ⅰ）は朝日遺跡以外類例に乏しいため、それがどういった状況において出現したのかという点についてにわかに答え難い。

尾張地方のⅡ期は、集落として確認されている遺跡でさえ僅かしかなく、構造まで判明しているとなると朝日遺跡のみという状況であり極めて心もとないのである。したがって、遺跡としてではなく、遺物のうえからⅡ期における何らかの変化を抽出するとすれば、とりあえず土器を指標として把握する以外にない。

Ⅱ期の土器は、尾張平野部の低湿地帯を主体的分布域とする朝日式と、犬山から名古屋台地、さらに知多半島にかけての台地部を主体分布域とする条痕文系土器に大別できる。

両系の分布域は尾張平野低湿地帯において交錯しており、朝日遺跡はちょうどその交錯地帯に位置している。その点では、両系の交渉が全く平穏であるならば無関係であるが、仮に緊張状態を生じていたなら朝日遺跡の〈囲郭集落〉成立との関係を想定することができる。とはいえ、Ⅱ期後半に朝日式が三河地方への波及を開始するらしい点、また条痕文系土器が朝日式の影響を受けるあるいはその逆という点、さらにこの時期の西部東海系条痕文系土器が遠賀川系土器波及期以来２度目の東方波及を見せる点など、決してゆったりしているとはいえない動きがあることも事実である。

Ⅱ期後半の土器様相に表われた一連の動きが、地域社会の枠組みの再編成を意味するならば、そこにおける社会的動向の一端が〈囲郭集落〉として表面化した可能性を考えることも決して的はずれではない。伊勢湾東岸における安定した農耕集落の広範な成立の端緒がⅡ期後半に辿れるという点も、そこに何らかの画期が存在したことを示しているのであり、〈囲郭集落〉の成立もそうした歴史的な結節点に深く関与したものかもしれない。

ⅱ)は、筆者が度々問題にしてきた、源流が山陽・近畿の境界付近に辿ることのできる〈畿内凹線文系土器群〉の波及期に相当しており、因果関係を想定することは比較的容易である。

〈畿内凹線文系土器群〉の波及に対応する事態のうち、とりあえず確実な点を整理すると以下のようになる。

a　在来の土器様式が根本的に変化する。Ⅳb期にはほとんど外来系で占められてしまうようになる。この変化は単に在来系器種と外来系器種の入れ替えというものではなく、土器製作体制そのものの転換をも意味する[23]。

b　畿内凹線文系土器群の波及だけでなく、在地の土器も本来の分布圏を超えて広範に移動・拡散する。技法的な伝播も顕著に認められる[24]。

c　三重県北部[25]、尾張地方平野部・名古屋台地においてⅣ期単純あるいはⅣ期以降継続する遺跡が急増する。

a～cによって示されるのは、尾張地方（伊勢湾周辺）への外来集団の進出と、それに対応する在来集団の動向であり、その最たるものが〈囲郭集落〉の形成なのである。

〈囲郭集落〉はⅣa期の段階で〈非囲郭集落〉化し、畿内凹線文系土器群波及後には〈囲郭集落〉が存在意義を喪失したことを示している。つまり、外来集団の進出を契機として〈囲郭集落〉の整備が行なわれるが、廃棄後には〈囲郭集落〉の結界施設の廃絶が進行し〈非囲郭集落〉化するのである。この〈非囲郭集落〉化段階には、土器様式の急激な斉一化[26]が進行し、周辺・遠隔地への波及も顕著になる。先にあげたa～cもほぼ〈非囲郭集落〉化段階に相当する事態であり、〈囲郭集落〉前後における隔差は極めて大きいと言わざ

るを得ない。

こうした外来集団の進出は当然在来集団との間に摩擦を引き起こし、その先々で軋轢を生んだであろうことは想像に難くない。〈囲郭集落〉の極だった複雑化・重装化という方向での整備や複数居住域の単一の〈囲郭単位〉への統合・集住は、そうした事態に実質的に対処する必要性が生じたことを示している。端的には集落の防御力を高めることが要求され企図されたことであろう。これらのことからいえば、この時期の〈囲郭集落〉は防塞的性格を前面に出したものといえるし、その〈非囲郭集落〉化はそうした努力が無に帰したことを示すのかもしれない。

ⅲ)はⅱ)と異なり、外来集団の進出を顕著に示す事実はなく、ⅰ)と同様在地における動向に関係したものと考えられる。ただし、Ⅴ期には畿内地方において大規模な争乱の発生したことが想定されているから[27]、そうした争乱に関する情報伝播によって〈囲郭集落〉を整備し争乱の波及に備えた可能性もある。仮にⅤ・Ⅵ期が古墳時代への移行期に相当することから、尾張平野部における集落相互の系列化による地域社会の再編に伴い争乱が発生した、という想定によって〈囲郭集落〉の形成を説明するにしても、現状において具体的事実としての状況復原は困難である。今後の課題である。

2　B型の出現と背景

高蔵遺跡については特に代表事例としての説明を加えなかっが極めて重要な位置を占めているのでここで触れておく。というのもちょうど遺跡が遠賀川系土器主体分布圏と条痕文系土器主体分布圏の接点に位置するという点で、〈囲郭集落〉としての理解はダイナミックな背景をも考慮する必要があるからである。つまり、外来集団（遠賀川系）と在来集団（条痕文系）の対峙に起因するものと見做すならば、平穏ではない社会情勢を想定しなければならなくなるからである。しかし、低地の遺跡として同様な位置にある朝日遺跡がⅠb期はどうも〈非囲郭集落〉である点を考えると、統一的理解はむつかしくなる。

高蔵遺跡の〈囲郭集落〉としてのタイプは、現状の確実視できるほどの資料集積がない状況で憶測するなら、台地縁（東）側を内部として複数の溝が弧状に配置されるものと考えられる。この形態は、Ⅰa期末～Ⅰb期の三重県大谷遺跡[28]、永井遺跡[29]と類似するもので、憶測が正しければ三者の関係が注目されるところである[30]。ほぼ同時期の遺跡における構造上の類似性は、遺跡形成集団の系譜を探る上で重要である。社会的要因をひとまずおけば、高蔵遺跡の〈囲郭集落〉は集落形態としてトータルに移入された可能性もある。大谷・永井両遺跡の類似性は、その位置的な近接性からいって同一系統あるいは同一集団の営為になるものとして捉え得る余地があることからいえば[31]、高蔵遺跡もその延長として理解することもできる。もちろん、〈非囲郭集落〉に比較しての重装化は無視できないから、いずれもほぼ

似通った条件下において成立したという意味においてまた外来集団・在来集団の軋轢を否定することもできない。今後の課題である。

大廻間遺跡は、同時期尾張平野部周辺においてA型が優勢であるのとは著しい対照をなすものであり、自然地形を最大限利用する故に〈囲郭集落〉としては簡略この上ない。恐らく、周辺地域も含めてⅤ・Ⅵ期の社会的動向と直接的関係を有していた可能性は薄い。仮にそれらを「高地性集落」の範疇に含めようとも、あくまで平野部を主体とする動向から切り離された周辺における局部的動向であるから過大視することはできない。名古屋台地における遺跡増加による過密化を解消するという一面も含んだ展開と見做しうるものである。特に伊勢湾臨海地帯という特殊性をこそ評価すべきであり、ことさら「高地性集落」の軍事面をのみ強調することは首肯できない(32) Ⅴ・Ⅵ期における伊勢湾周辺の土器様式斉一化の要因としての海上交通盛行に対応したものと考えることもできる。

A型に比べ不完全であると言わざるを得ないB型も、〈非囲郭集落〉に比べれば質的な差を考慮せざるを得ない。集落の基本としての集団自体が、人間の個としての弱さをアプリオリに補完するものであれば、不完全なりにも〈囲郭集落〉へ移行するに際しては、その原因となるべき社会情勢の変化は生じていたはずである。その社会情勢に直接関与していたのか間接関与していたのかはともかくとして、社会情勢の具体的復原をまず果たす必要がある。

おわりに

尾張地方における弥生時代の〈囲郭集落〉は、現状においてそのすべてを直接争乱に対応したものとすることはできないし、弥生集落の基本形態であるとも言えない。

一応、Ⅲb期末からⅣa期初めにかけての〈囲郭集落〉は、まさに社会的変動期にあたるため防塞的性格の強いものであると思われるが、それ以外をも含めて論ずるには十分ではない。

〈囲郭集落〉の全体的・細部的構造はもちろん、〈囲郭集落〉のそれぞれの地域における分布及び通時的変動など、広範なデータの集積を果たすにはなおまだ多大な時間を要すると思われる。その意味では、ある程度予察を先行させた研究を進めることもやむおえないが、これまでのように防御的集落という前提のみから一元的理解に向かうというのでは、それぞれの地域ごとの特性を等閑視することになりはしないかという危惧をもっている。防御的集落が成立したから何らかの緊張があった。争乱が生じたという結論先取りの論法ではなく、地域的にどういった変動が生じたのかということをこそ〈囲郭集落〉以外の事実関係から明らかにすべきであろう。〈囲郭集落〉については遺物的把握ではなく、文化・社会的にトータルな問題として整合的に位置づけていくべきであろう。

〔注〕

(1)　ここでいうⅠａ期・Ⅰｂ期の２小期区分は、従来の「貝殻山式」、「西志賀式」には対応しない。朝日遺跡等の遺構変遷・遺跡展開から導かれる区分であり、極めて大雑把なものである。

(2)　大参義一「弥生式土器」(『環状２号線関係、朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会　1975)「貝田町古期」は一般性をもつが、「貝田町新期」は区分があいまいであり、適用するには問題が多い。

(3)　石黒立人「阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について　―　２」(『埋蔵文化財調査年報Ⅲ』愛知県教育サービスセンター　1985)「大渕遺跡」(同)。

(4)　注(3)に同じ。

(5)　注(3)に同じ。

(6)　注(3)に同じ。

(7)　注(3)に同じ。

(8)　「欠山式」を弥生土器とするか古墳時代土器とするかは意見の分かれるところであるが、ここでは〈囲郭集落〉の変遷を追跡する必要上からⅥ期とした。

(9)　阿弥陀寺遺跡の調査概要は、愛知県教育サービスセンター年報Ⅰ～Ⅲで報告済である。昭和59年度分を含めた全体像は本年報に収録している。

(10)　愛知県教育委員会（『朝日遺跡』1982）で県文化財課担当分は報告済である。文中の「報告書」はこれを指す。

(11)　結界外の住居は〈非囲部集落〉時のものであって、内外すべてが同時併存ではなかろう。

(12)　石黒立人「愛知県朝日遺跡における墓域形成の一様相」（『考古学の広場』１　1983）

(13)　知多市教育委員会（『大廻間遺跡』1975）

(14)　三渡俊一郎「名古屋市見晴台遺跡と附近の弥生時代濠状遺構」（『古代人』40　1982）

(15)　名古屋市教育委員会（『高蔵遺跡発掘調査概要報告書』1982）

(16)　天野暢保・畔柳典造「古井町本神遺跡について」（『安城市史研究』３　1967）

(17)　岡崎市教育委員会（『東郷遺跡』1985）

(18)　豊橋市瓜郷遺跡調委会「附載第二　欠山遺跡」（『瓜郷』1964）

(19)　石野博信「３世紀の高城と水域」（『古代学研究』68　1973）２頁

(20)　都出比呂志「環濠集落の成立と解体」（『考古学研究』29－４　1983）

(21)　注(19)に同じ。

(22)　都築暢也「遺構」（『環状２号線関係　朝日遺跡群発掘調査中間概報８』愛知県教育委員会　1981）都築氏は環濠の消長を社会的緊張の緩急に対応させているが、社会的緊張の具体的事実についての指摘はない。

(23)　注(3)に同じ。

(24)　Ⅳ期における、関東地方への台付甕の先駆的波及など。

(25)　伊藤　洋「三重県北勢部の弥生時代遺跡について」（『三重考古』２　1978）

(26)　高蔵式はこの斉一性を重視した様式名である。長床式は在来系（獅子懸式・古井式・下長山式）を含むものとして設定されているようであり両者は理念的に異なる。

これらの点については、注３文献に述べてある。斉一性はあくまで外面的。一面的な特徴にすぎない部分もあり、内容を吟味する必要がある。

(27)　豊岡卓之「「畿内」第Ⅴ様式暦年代の試み（上）（下）」（『古代学研究』109　1985）

(28)　四日市市教育委員会（『大谷遺跡発掘調査報告』1966）

(29)　四日市市教育委員会（『永井遺跡発掘調査報告書』1973）

(30)　筆者は、大谷・永井両遺跡との立地、形態の類似性、時期的な近接性から相関関係を認めようとしたのであるが、今後の調査次第ではどうなるかわからないという部分もある。たとえば、1985年度高蔵遺跡調査会による調査成果をみると、２条の環濠がめぐる可能性もあるのであり、もしそうなれば本論に述べたことは正に憶測と化すことになる。詳細は今後に期待したい。

(31)　永井・大谷類型として設定できるかもしれない。伊藤久嗣氏の指摘による。

(32)　伊藤禎樹「伊勢湾と「海つ道」」（『古代の地方史』４　朝倉書店　1978）

(33)　成稿にあたって下記の方々に御指導御教示戴いた。記して感謝します。（順不同敬称略）原口正三、重松和男、伊藤久嗣、高橋信明、山田鉱一、加納俊介